

8) 「子どもの人権」に関する考え方

表 15 は、「子どもの人権」に関する考え方を問う 8 変数の度数分布である。

表 15

「子どもの人権」に関する考え方	合計	そう思う	どちらかそう思う	どちらかそうわない	そうは思わない	無回答
1 いじめは、いじめを受ける側にも問題があるのではないかと思う	1420	5.6%	25.1%	34.1%	33.8%	1.3%
2 親が、子どものしつけのために体罰を加えるのは仕方ない	1420	3.9%	21.3%	33.0%	40.6%	1.1%
3 教師が、子どもを指導するために体罰を加えることも必要だ	1420	3.7%	17.7%	29.9%	47.5%	1.2%
4 不登校は本人の甘えも関係しているのではないかと思う	1420	6.8%	31.8%	33.5%	26.5%	1.4%
5 地域の居場所づくりの取り組みに参加したい	1420	10.5%	37.1%	34.4%	15.9%	2.0%
6 大人はもっと子どもの意見に耳を傾けるべきだ	1420	36.1%	54.8%	6.3%	1.2%	1.6%
7 子どもの前で、父親が母親（または、母親が父親）に暴力を振るったり暴言を吐いたりすることは子どもへの虐待である	1420	63.5%	28.8%	4.4%	2.0%	1.3%
8 子どもは大人の言うことに従うことが望ましい	1420	2.7%	34.5%	37.6%	23.5%	1.6%

これらの変数を用いて因子分析を行う。

因子分析に先立って、人権意識の低い考えほど点数が低くなるように選択肢を並び替える。「5 地域の居場所づくり（子ども食堂など）の取り組みに参加したい」、「6 大人はもっと子どもの意見に耳を傾けるべきだ」、「7 子どもの中で、父親が母親（または、母親が父親）に暴力を振るったり暴言を吐いたりすることは子どもへの虐待である」については、「そうは思わない」1、「どちらかと言えばそうは思わない」2、「どちらかと言えばそう思う」3、「そう思う」4 と変換する。人権意識が低いと考えられる変数の後ろに（逆）を付す。

表 16 は、因子分析の結果である。

表 16

子どもの人権に関する考え方	第1因子	第2因子	共通性
3 教師が、子どもを指導するために体罰を加えることも必要だ (逆)	0.756	0.199	0.617
2 親が、子どものしつけのために体罰を加えるのは仕方ない (逆)	0.686	0.252	0.530
4 不登校は本人の甘えも関係しているのではないかと思う (逆)	0.556	0.09	0.315
1 いじめは、いじめを受ける側にも問題があるのではないかと思う (逆)	0.473	0.036	0.224
6 大人はもっと子どもの意見に耳を傾けるべきだ	0.051	0.682	0.452
5 地域の居場所づくりの取り組みに参加したい	0.086	0.439	0.208
7 子どもの前で、父親が母親 (または、母親が父親) に暴力を振るったり暴言を吐いたりすることは子どもへの虐待である	0.149	0.373	
因子寄与率	23.0	13.0	
因子累積寄与率	23.0	36.0	
クロンバックの信頼性係数	0.727	0.486	
因子解釈	子ども 尊重意識	子ども 理解意識	

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

因子分析の結果、第 1 因子に「3 教師が、子どもを指導するために体罰を加えることも必要だ (逆)」、「2 親が、子どものしつけのために体罰を加えることは仕方ない (逆)」、「4 不登校は本人の甘えも関係しているのではないかと思う (逆)」、「1 いじめは、いじめを受ける側にも問題があるのではないかと思う (逆)」が高い因子負荷量を示している。これらは、大人が子どもの人権を尊重する意識と解され、第 1 因子を「**子ども尊重意識**」因子と名付ける。第 2 因子には、「6 大人はもっと子どもの意見に耳を傾けるべきだ」、「5 地域の居場所づくり (子ども食堂など) の取り組みに参加したい」、「7 子どもの前で、父親が母親 (または、母親が父親) に暴力を振るったり暴言を吐いたりすることは子どもへの虐待である」が高い因子負荷量を示している。これらは、大人が子どもの声に耳を傾け、子どもの思いに寄り添おうとする意識と解されることから、第 2 因子を「**子ども理解意識**」因子と名付ける。

「子ども尊重意識」と「子ども理解意識」とが別の因子となったことを押さえておこう。

クロンバックの信頼性係数は、「子ども尊重意識」因子は 0.727 であって、尺度を構成するうえで問題ない。「子ども理解意識」因子は 0.486 と低いですが、今回はこのまま尺度化する。

第 1 因子に高い因子負荷量を示す変数への回答の点数の平均値を「**子ども尊重度**」尺度とする。「また、第 2 因子に高い因子負荷量を示す変数への回答の点数の平均値を「**子ども理解度**」尺度とする。1 から 4 に分布する。

9) 「女性の人権」に関する考え方

表 17 は、「女性の人権」に関する考え方を捉える 9 変数の度数分布である。

表 17

「女性の人権」に関する考え方	合計	そう思う	どちらか 思う	どちら かわない	そう はない	無 回答
1 女性は男性を立てるべきだ	1420	2.1%	16.5%	32.6%	47.2%	1.6%
2 母親は子どもが3才ぐらいまでは育児に専念することが望ましい	1420	15.9%	38.0%	23.9%	20.6%	1.5%
3 昇給・昇進など、職場で男女の処遇に違いがあるのは問題だ	1420	51.0%	35.4%	8.6%	3.5%	1.5%
4 ドメスティック・バイオレンス（DV）は振るう側にこそ問題がある	1420	54.8%	32.0%	6.8%	4.5%	1.9%
5 知り合いの女性から夫のDVについて相談を受けた場合、ふたりできちんと話し合いをするように忠告したい	1420	11.3%	22.2%	34.2%	30.6%	1.8%
6 男性も積極的に育児休業をとるべきだ	1420	39.1%	44.4%	12.5%	2.3%	1.8%
7 女性が『土俵に上がれない』『祭りのみこしに乗れない、担げない』など女人禁制のしきたりがあるが、伝統として尊重すべきだ	1420	12.6%	28.5%	35.1%	22.0%	1.8%
8 女性は結婚する時、男性の姓を名乗るほうがよい	1420	8.0%	29.6%	30.9%	29.7%	1.7%
9 日本は、まだまだ男女が平等な社会になっていないと思う	1420	44.8%	43.9%	8.0%	1.8%	1.4%

これらの変数を用いて、因子分析を行う。

因子分析に先立って、人権意識が低いほうほど点数が低くなるようにするために選択肢を並び替える。「3 昇給・昇進など、職場で男女の処遇に違いがあるのは問題だ」、「4 ドメスティック・バイオレンス（DV）は振るう側にこそ問題がある」、「6 男性も積極的に育児休業をとるべきだ」については、「そうは思わない」1、「どちらかと言えばそうは思わない」2、「どちらかと言えばそう思う」3、「そう思う」4 と変換する。人権意識が低いと解釈される変数の後ろに（逆）を付す。

表 18 は、因子分析の結果である。

第 1 因子には、「8 女性は結婚する時、男性の姓を名乗るほうがよい（逆）」、「1 女性は男性を立てるべきだ（逆）」、「2 母親は子どもが 3 才ぐらいまでは育児に専念することが望ましい（逆）」、「7 女性が『土俵に上がれない』『祭りのみこしに乗れない、担げない』など女人禁制のしきたりがあるが、伝統として尊重すべきだ（逆）」が高い因子負荷量を示している。第 1 因子は、男性優位社会を認めない意識と解され、「**男性優位否定意識**」因子と名付ける。現行の夫婦同姓制度も、子どもが 3 歳ぐらいまでは母親が育

児に専念するのが望ましいという、いわゆる“三歳児神話”も、“伝統”の名の下に女性を排除する文化も、いずれも男性優位社会を存続するための文化的装置であることが示唆される結果と言える。第2因子には、「3 昇給・昇進など、職場で男女の処遇に違いがあるのは問題だ」「4 ドメスティック・バイオレンス (DV) は振るう側にこそ問題がある」、「6 男性も積極的に育児休業をとるべきだ」が高い因子負荷量を示している。「**男女参画支持意識**」因子と名付ける。そして、第3因子は、「5 知り合いの女性から夫のDVについて相談を受けた場合、ふたりできちんと話し合いをするように忠告したい(逆)」のみが高い因子負荷量を示している。DV夫と被害者の妻と話し合うように忠告することはあってはならないことであることから、逆の考えを「**DV理解意識**」因子と名付ける。

「男性優位否定意識」、「男女参画支持意識」、「DV理解意識」が別の因子となったことを押さえておこう。

クロンバックの信頼性係数は、「男性優位否定意識」因子は0.624、「男女参画意識」因子は0.483である。今回は、これらの変数への回答の平均値を尺度とし、「**男性優位否定度**」、「**男性参画支持度**」、「**DV理解度**」とする。1から4に分布する。

表 18

女性の人権に関する考え方	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
8 女性は結婚する時、男性の姓を名乗るほうがよい (逆)	0.603	0.152	0.121	0.402
1 女性は男性を立てるべきだ (逆)	0.584	0.215	0.208	0.431
2 母親は子どもが3才ぐらいまでは育児に専念することが望ましい (逆)	0.515	0.028	0.18	0.298
7 女性が「土俵に上がれない」「祭りのみこしに乗れない、担げない」など女人禁制のしきたりがあるが、伝統として尊重すべきだ (逆)	0.403	0.051	-0.05	0.168
3 昇給・昇進など、職場で男女の処遇に違いがあるのは問題だ	0.261	0.563	0.028	0.385
4 ドメスティック・バイオレンス (DV) は振るう側にこそ問題がある	-0.065	0.441	0.135	0.217
6 男性も積極的に育児休業をとるべきだ	0.273	0.435	-0.152	0.287
5 知り合いの女性から夫のDVについて相談を受けた場合、ふたりできちんと話し合いをするように忠告したい (逆)	0.151	0.05	0.573	0.354
因子寄与率	16.3	9.7	5.8	
因子累積寄与率	16.3	26.0	31.8	
クロンバックの信頼性係数	0.624	0.483		
因子解釈	男性優位 否定意識	男女参画 支持意識	DV理解 意識	

因子抽出法: 主因子法 パリマックス回転法

回転法: Kaiserの正規化を伴うパリマックス法

10) 「高齢者の人権」に関する考え方

表 19 は、「高齢者の人権」に関する考え方を捉える 7 変数の度数分布である。

表 19

「高齢者の人権」に関する考え方	合計	そう思う	どちらかといえば思う	どちらかといえば思う	そうは思わない	無回答
1 高齢者への虐待は、高齢者の方にも原因があると思う	1420	4.3%	20.5%	37.2%	36.8%	1.3%
2 高齢者が能力を発揮できるように就労や社会活動の機会を増やすべきだ	1420	38.7%	51.3%	6.2%	2.5%	1.4%
3 地域の高齢者の方々と積極的に交流していきたい	1420	15.8%	48.1%	27.0%	7.4%	1.6%
4 高齢者に対する法的支援・医療支援は不十分だと思う	1420	15.5%	39.4%	33.9%	9.0%	2.2%
5 高齢者は人生の先輩として尊敬されるのが望ましい	1420	27.0%	55.5%	12.9%	3.0%	1.6%
6 高齢になっても高齢者施設であれ、住み慣れた地域であれ、生活するところを自分で選べるのが望ましい	1420	54.6%	40.6%	2.8%	0.6%	1.3%
7 高齢者に対する公的な（経済的）保障は十分だと思う	1420	8.5%	31.7%	40.9%	16.9%	2.0%

これらの変数を用いて因子分析を行う。

因子分析に先立って、人権意識が低いほど点数が低くなるように選択肢を並び替える。

「2 高齢者が能力を発揮できるように就労や社会活動の機会を増やすべきだ」、「4 高齢者に対する法的支援・医療支援は不十分だと思う」、「5 高齢者は人生の先輩として尊敬されるのが望ましい」、「6 高齢になっても高齢者施設であれ、住み慣れた地域であれ、生活するところを自分で選べるのが望ましい」については、「そうは思わない」1, 「どちらかといえば思う」2, 「どちらかといえば思う」3, 「そう思う」4 と変換する。また、人権意識が低いと解釈される変数の後ろに（逆）を付す。

因子分析の結果は、表 20 のとおりである。

因子分析の結果、第 1 因子には、「2 高齢者が能力を発揮できるように就労や社会活動の機会を増やすべきだ」「5 高齢者は人生の先輩として尊敬されるのが望ましい」、「3 地域の高齢者の方々と積極的に交流していきたい」、「6 高齢になっても高齢者施設であれ、住み慣れた地域であれ、生活するところを自分で選べるのが望ましい」が高い因子負荷量を示している。これらは、だれもが高齢になっても地域社会の中できちんと生活し続けることを支持する意識と解されることから、「**高齢者包摂意識**」因子と名付ける。第 2 因子には、「4 高齢者に対する法的支援・医療支援は不十分だと思う」、「7 高齢者に対する公的な（経済的）保障は十分だと思う（逆）」が高い因子負荷量を示している。高齢者への十分な支援の必要性を支持する意識と解されることから、「**高齢者支援意識**」因子と名付ける。

「高齢者包摂意識」と「高齢者支援意識」と別の因子となったことを押さえておこう。

表 20

高齢者の人権に関する考え方	第1因子	第2因子	共通性
2 高齢者が能力を発揮できるように就労や社会活動の機会を増やすべきだ	0.543	0.12	0.309
5 高齢者は人生の先輩として尊敬されるのが望ましい	0.542	0.139	0.313
3 地域の高齢者の方々と積極的に交流していきたい	0.539	0.179	0.323
6 高齢になっても高齢者施設であれ、住み慣れた地域であれ、生活するところを自分で選べるのが望ましい	0.521	0.033	0.273
4 高齢者に対する法的支援・医療支援は不十分だと思う	0.192	0.748	0.597
7 高齢者に対する公的な（経済的）保障は十分だと思う（逆）	0.09	0.585	0.350
因子寄与率	19.9	16.1	
因子累積寄与率	19.9	36.1	
クロンバックの信頼性係数	0.624	0.625	
因子解釈	高齢者包 摂意識	高齢者支 援意識	

因子抽出法: 主因子法 バリマックス回転法

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

クロンバックの信頼性係数は、「高齢者人権包摂意識」0.624、「高齢者支援意識」0.625であり、いずれも尺度化において問題ないと判断できる。

「高齢者包摂意識」に高い因子負荷量を示す変数への点数の平均値を「**高齢者包摂度**」尺度とし、「高齢者支援意識」に高い因子負荷量を示す変数への点数の平均値を「**高齢者支援度**」尺度とする。いずれも1から4の値を取る。

11) 「性的指向・性別不合」に関する考え方

表 21 は、「性的指向・性別不合」に関する考え方を捉える 9 変数の度数分布である。

これらの変数を用いて因子分析を行う。

因子分析を行うにあたって、人権意識の低いほど点数が低くなるように選択肢を並び替える。「1 同性愛については、受け入れたいと思う」、「2 性別不合については、受け入れたいと思う」、「4 同性のカップルが近所に住むのは気にならない」、「5 同性婚を認めても良いと思う」、「6 トランスジェンダーの人も困らないようにトイレの施設整備や配慮をしていくのが望ましい」、「8 職場に同性愛者の同僚・上司がいても問題ないと思う」、「9 三田市の同性パートナーシップ宣誓制度は、賛成（理解できる）である」については、「そうは思わない」1, 「どちらかと言えばそうは思わない」2, 「どちらかと言えばそう思う」3, 「そう思う」4 と変換する。人権意識が低いと解釈される変数の後ろに（逆）を付す。

因子分析の結果は、表 22 のとおりである。